

〔共同研究：一般大学における職業教育者の実態的研究〕

教育実習による教職課程履修学生の意識変化

竹 中 晖 雄

はじめに

この調査は、教職課程履修学生の意識が、教育実習体験をはさんでいかに変化するか（しないか）を調べることを主目的としている。この調査を行なうことになった問題意識・意図について最初にのべておきたい。

それまで受動的・消極的な学校教育に慣れ切ってきた学生たちが、より能動的・積極的な学習経験を重ねるようになる機会に卒論執筆があるが、それと並んで、時にはそれ以上に、充実した日々の強烈・鮮明な記憶を大学生活に残すものに、教育実習体験がある。このことは実習参加学生のほぼ全員が、興奮ぎみに語り、実習簿に書きしるすことである。現状ではわずか2週間という短期間ながら、この期間に彼らは、教育者と被教育者という主客関係の逆転した状況の中で、数十人の生きた人間と対峙しつつ、自分自身のそれまで身につけてきたほとんどあらゆる能力や学力といやおうなく対決することを迫られるのである。

けれども近年、さまざまな理由により教職課程履修学生が激増し、大量の教育実習生たちが全国にあふれ、しかもその上、一般大学卒教員免許取得者のうち、実際に教職につくのはほんのわずか、という現実が明らかになるにつれ、教育実習「迷惑論」や「公害論」が唱えられ、一般大学生を教育実習から閉め出そうとする動きが活発化してきた。

もっとも、すべての入学者を一定の期間内にほぼ完成した教員にしてあげようとする、つまり戦前の師範学校的なものを復活させようとする立場は戦後も早くから存在してきた。比較的最近には、例えば自民党の「教員養成大学設

置要綱案」（1972年7月）が、「入学者の選抜は高校長の推薦の他調査書、作文、身体検査、人物考査を原則とする」「低学年は全寮制を原則とする」「教育実習は35週（1年）相当とする」などとのべているし、同党はその後もまた、「（ペーパーティーチャ追放のため）少なくとも、小・中学校の教員免許は、専門の教員養成学校で教育を受けた人びとに限定して与えるべきであろう」（「教育の新しい方向」1979年7月）と主張している。

特別の教員養成大学を作らなくても、例えば一般大学教職課程の必修単位数を増加させ、実習期間を「6週間以上」にせよとの教育職員養成審議会答申「教員養成の改善方策について」（1972年7月）や全日本中学校長会の提言（1979年10月、後述）もまた、実質的に一般大学を教員養成から排除するものである。

戦後教員養成の二大原理は、「大学での養成」と「開放性」であった。この場合「大学での養成」というのは、ただ単に師範学校という中等学校を「大学」に格上げすることだけではなく、「あらゆる大学」での養成をも意味していたは

表0-1 小学校教員総数に占める師範学校卒業生の割合

	男	女	計
昭和10年	65.3 (82.3)	53.2 (80.3)	61.2 (81.7)
11年	65.4 (82.2)	53.1 (80.1)	61.2 (81.6)
12年	66.6 (83.5)	51.0 (77.6)	61.3 (81.7)
13年	65.5 (82.4)	51.8 (80.1)	61.1 (81.7)
14年	68.0 (83.6)	50.3 (78.5)	61.6 (81.9)

1. () は本科正教員数に占める割合

2. 最も充実した時期における数字である

3. 出典：牧昌見『日本教員資格制度史研究』（風間書房、昭和46年）422頁

表0-2 中等学校教員数資格別比率 (%)

		明治33年	明治38年	明治43年	大正4年	大正9年	大正14年	昭和5年	昭和10年
中 学 校	目的学校卒	57.4	10.7	16.2	19.9	19.4	18.0	19.8	23.5
	検定		52.8	60.9	59.1	54.6	56.7	65.6	66.3
	無資格		42.7	36.5	22.9	21.0	26.0	25.3	14.6
高等 女 学 校	目的学校卒	39.7	29.6	27.5	28.8	28.1	23.4	22.5	25.8
	検定		29.7	40.2	41.2	41.1	46.8	61.3	64.3
	無資格		60.3	40.6	32.3	30.0	30.8	29.8	9.9
師 範 学 校	目的学校卒	79.3	19.6	52.4	55.8	51.5	44.7	41.6	44.7
	検定		25.8	37.7	33.4	35.4	42.1	49.2	49.9
	無資格		20.7	54.6	9.9	10.7	13.1	13.2	9.2

出典：牧昌見、前掲書 432-3 頁から作成（誤植は是正して計算）

ずである。つまり入学者のすべてを教員にしたてあげるのではなく、入学者のうち教職への漠然とした関心と理想を抱いた者が教職課程を履修し、その結果その適任性を自覚しなお教職への意思強固な多くの候補者の中から、教員を「選考」することがめざされたのである。

教員の排他的・閉鎖的な目的養成が問題なのは、それが旧師範的な教員統制につながり易いからだけではない。それは非現実的だからでもある。文部省大学局教職員養成課の調査によれば、1977年3月一般大学卒業の中学校免許状取得者のうち、同年6月1日までに教職に就職したのはわずか7.4%であり、同じく高校の場合は5.7%ではある。けれども中学校就職者中、一般大学卒業者が占める割合は56.3%であり、高校の場合は79.6%にもなるのである。同様のこととは戦前においてもいえるのであって、表0を見れば、戦前の教員養成が「閉鎖的」であったとは、実態上はとてもいえないのである。

教員の排他的目的養成に賛成できないいま一つの理由は、いうまでもなくこの制度は、一般大学入学後に教職への関心を持ち始めた学生の道を閉ざすからであり、逆に途中で教職には向かないことを自覚したり、自己により適切な職業を他に発見した学生たちを、必然的に目的大学の「落ちこぼれ」としてしまい、不必要的劣等感・挫折感を与えててしまうからである。

文部省教職員課「教員養成のための教育実習

のあり方について」（1969年3月）は、「教育実習」とは「教職を希望する学生が、大学の授業では容易に得ることのできない教育的諸能力（とりわけ、技術的なもの）を実習指導教官のもとに具体的な経験を通して集中的に身につけ、それによって教師たるの資質を啓培する期間」であるとのべている。これは文書の性格からして当然のことであるが、「閉鎖制」の下ではなお一層のこと、教育実習の意義は教師としての技術的訓練に限定されることになり、その場合、教職に就かなかった者にとっては、実習は全く無益無駄な時間の浪費ということになってしまうであろう。

ところで、戦後教員養成のかなり重要な部分を担ってきたにもかかわらず、状況の変化という都合によって一般大学とりわけ私立大学を教員養成から排除しようとする傾向が強まってきたのに抗して、各地に私立大学教職課程研究連絡協議会が結成され始め、1980年5月17日にはその全国組織が設立されるに至った。しかしあれわれは、こうした組織が他方では、私大教職課程の安易・無責任な運営、看板としてのみ教職課程を利用する経営者の営利主義および自分たちすべてが教員養成に直接タッチしているのだということに関する大学人の無自覚が、戦後教員養成の二大原理を自ら崩壊させつつあることに厳しい反省を加えるものであることもまた、忘れるわけにはいかない。

このような動きの中で、阪神地区の協議会から、教員の目的養成化を志向する全日本中学校長会の提言「教員養成制度の改善について」(1979年10月)についての意見発表の機会を与えた際(1980年7月)，筆者はその中で、教育実習の持つ意義として広く次の四つを考えた(『阪神教協リポート』No.4, 1980年10月8日，参照)。

第一は言うまでもなく、将来の教員としての実地訓練である。従来はもちろんこの意義、しかも技術訓練中心にしか考えられていなかったのである。けれども既に1977年に、国立大学協会教員養成制度特別委員会が、「今日、意識的な教員養成の教育のなかで、教育実習に期待されることは、具体的な教育の現実にふれることによって、むしろ自らの学問、芸術の学び方」「自らの知識や技能がどれだけ自分自身の身についたものになっているか」問い合わせしていくことであると考えられるようになってきている、とのべているのは重要である(「大学における教員養成——その基準のための基礎的検討」1977年11月)。同委員会はだからこそ、「必ずしも教職に就くことを志願しない者についても、教育実習を通じて獲得する経験はきわめて貴重」であり、一般大学においても「可能な限り教育実習を体験する機会を保証することが必要である」と主張したのである(もちろん同時に教職課程センターの設置など諸条件の整備を提言したことであるが)。

第二は、将来の社会人・父母としての、いわば「一般教養」的な意義である。教育実習は日本の教育のナマの現実、それととり組まなければならぬ学校・教師の仕事に対する理解を得る絶好の機会である。「教育荒廃」の解決を真剣に考えていくためには、教師にならなかつた人間に対して持つ実習のこの意義が極めて大きいと思われる。なぜなら「教育荒廃」の解決のためには、教師・父母間の相互理解が不可欠であるからである。両者が互いに責任のなすりつけ合いをしている限り問題の解決などありえない。また父母自身、自らが多かれ少なかれ「荒廃」を生みだすことに手を貸している面も

あることに気づかなくてはならない。

将来たとえ福祉職につかなくても、「障害」者や老人の施設などで実習することが、人間としての「一般教養」として意味ないどころか大変積極的意義を持つことと同じである。しかしそのためには、実習は厳しく行なわれないと、かえって逆効果となるであろう。

第三は、現職教師自身の研修の場としての意義である。「人を教えることによってこそ自分自身よりよく学べる」との一般的原則は、教育実習にもあてはまるのである。

第四の意義は、児童・生徒が教師の仕事の厳しさを学ぶ場ということである。一般に何かある職業をめざして訓練を受けている者の姿を見ることは、教育上極めて有意義なことであるが、現代の生徒たちにはこうした機会はほとんどないでのある。眼前で厳しく鍛えられている実習生の姿から、生徒たちは、日頃なに気なく見慣れている教師のちょっとした仕事も、実はいかにむずかしいものであるかを知るのである。

以上の四つの意義以外にも、教職員としての適否を検定する場という意義が考えられる。実習校側からは、「教職志望の意志が堅く資質能力の優れた学生を厳選」(前出、全日中提言)してほしいとの要求が強い。これは現在の諸状況を考慮すれば誠にもっともな要求ではあるが、けれども眞の適否とは、生きた生徒たちにとりかこまれ、彼らとの相互接触を体験する中でしか判断できない、ということもまた否定できない。つまり実習生を「厳選」しようとするが、実習こそが「厳選」の場であるという自己憧着が存在するのである。

これらのこととは教育実習生に学んだ時の自分の体験や、教育実習生としての自分自身の経験から判断して観念的に考え出したのであって、別に実証されたものではなかった。そこでまず第二の意義について、果してこういうことがいえるのかどうか調べてみようと思ったのが、この調査の動機であった。

全国私立大学教職課程研究連絡協議会の態度表明「教師教育の在り方について——私立大学の立場から」(1982年5月15日)においても、

「教職課程の教育は、かれらが将来、かりに教壇には立ち得なかったとしても、少なくともかれらが家庭の聰明な父母として、あるいは地域の教育を支える住民のひとりとして、とりわけ学校や教師の仕事のよき理解者として、国民教育を支え、充実させてゆくための貴重な素地を作り上げていることになる」とのべられているように、今後ますますこの第二の意義は重要度を高めていくと思われる。しかしだからといって安易に実習生を増やしていくほうがよいなどと論じているのでは決してないのであって、このことに関しては「おわりに」で再び触れるところとする。

各種引用文献については、日本教育学会教師教育に関する研究委員会編の『教師教育問題に関する資料集』(その1) (その2) (1980年3月), 『教師教育の改善に関する実践的諸方策についての研究—最終(第4次)報告—付資料集(その4)』(1982年8月)を使用。
参考文献: 上田学「教職課程履習学生の意識」「教育実習の効果に関する調査研究」(『帝塚山大学論集』第28号, 昭和55年4月, 第35号 昭和56年12月)

1. 調査方法・調査対象

調査対象は本学の1982年度教育実習履修者56

名であるが、欠席等のため第1次アンケート回答数は51(回収率91.1%), 第2次アンケートは54(同96.4%)であった。第1次アンケートは、教育実習直前のオリエンテーションの時に行ない(1982年5月15日), 第2次アンケートは実習終了後の反省会の時間に実施した(7月5日)。但し実習が秋の学生については、終了後その都度学務課へ提出してもらった(12名)。両アンケート回答用紙に任意の個人番号の記入を依頼して追跡調査に役立てたが、それにより1次・2次の同一の回答者と特定できたのは49名であった。

回答者の内訳および実習先の内訳は表1・2のとおりである。

総数54名中47名が出身校実習である。

5回生以上および聴講生を除いた4回生48名のみの実習校所在地を比率でみると、大阪府27.1% (13校), 他の近畿府県20.8% (10校), その他府県52.1% (25校)となる。ところが新入時の調査によれば(学務課「昭和54年度新入生実態調査報告書」1979年5月17日), 彼らの出身高校所在地の比率は、大阪府52.5%, 他の近畿府県23.5%, その他24.0%である。4回生

表1 回答者内訳 ()は女子内数

	4回生	5回生以上	聴講生	E (経済学部)	S (社会学部)	B (経営学部)	男	女	総数
I (第1次調査)	45	1	5	14 (2)	33 (13)	4 (2)	34	17	51
II (第2次調査)	48	1	5	17 (3)	33 (15)	4 (2)	34	20	54
I + II	43	1	5	14 (2)	31 (13)	4 (2)	32	17	49

表2 実習校内訳(第2次調査による)

	種別			設置者別		所在地							総数	
	中学校	高校	その他	公立	私立	大阪	京都	兵庫	滋賀	和歌山	奈良	三重	その他	
計	28	24	2	50	4	16	0	5	0	4	2	1	26	54
男	18	16	0	32	2	10	0	5	0	3	1	1	14	34
女	10	8	2	18	2	6	0	0	0	1	1	0	12	20

* 「その他」の2名はいずれも養護学校である。

で出身校以外で実習した学生が4名おり、また出身高校の所在地と実習出身中学のそれとが必ずしも一致するとは限らないが、教員免許取得傾向は、地方出身学生においてはるかに強いと指摘することができる。

なお、実習オリエンテーションその他の参考資料とするため、質問項目はアンケートⅠで76、Ⅱで73と極めて多いが、以下この報告では、意識変化を中心にのべていくことにする。

2. 教職課程履修学生について

調査Ⅰ（付録参照）から、家族に学校や塾の教師がいる（あるいは「いた」）実習生の比率を求める表3のようになる。

表3 家族に教師がいるかどうか（調査Ⅰから）
N=51

	学校教員	塾教師	両方	いない
親にいる	25.5 (13)	(0)	(0)	74.5 (38)
兄弟姉妹その他身近なところにいる	49.0 (25)	(0)	3.9 (2)	47.1 (24)

単位は%，（ ）は実人数（以下、特別なものを除き同様）

回答からさらに、親・兄妹（その他）のどちらにも教職者がいる学生を求める17.6%（9人）、また親か兄妹（その他）のどちらか、あるいは両方に教職者を持つ学生は60.8%（31人）となった。

新入学時調査では、「家庭の職業」が「学校関係」というのは3学部平均3.4%にすぎないで（前掲学務課資料）、質問内容が必ずしも同一とはいえないにしても、親に教師を持つ実習生の比率は非常に高い。兄弟姉妹については比較資料はないが、常識的に判断してやはり極めて高く、親や、とりわけ兄妹に教師がいるかどうかが、教職課程履修の動機に大きな影響を与えた。

表4 家族の状況×教職志望の強さ（調査Ⅰから）

	親に教師がいる(13)	親に教師がない(38)	兄弟姉妹に教師がいる(27)	兄弟姉妹に教師がない(24)	親や兄弟姉妹に教師がいる(31)	親や兄弟姉妹に教師がない(20)
採用試験の受験準備中である	76.9 (10)	55.2 (21)	59.2 (16)	62.5 (15)	61.3 (19)	60.0 (12)
浪人しても教職につきたい	69.2 (9)	42.1 (16)	66.7 (18)	29.2 (7)	64.5 (20)	25.0 (5)
卒業後通信教育を受けたい	76.9 (10)	42.1 (16)	63.0 (17)	37.5 (9)	61.3 (19)	35.0 (7)

えている、といえる。

家族に教師がいることと、教職志望の強さとの関係はどうであろうか。表4が示すように、家族に教師がいる場合、いない場合に比べ、時間がかかるても教職に就きたいという意識がかなり強い。

調査ⅠⅡを通じて同一人と特定できた49人について、実習後のこのような意識の変化を調べたのが、表5である。同じような傾向が実習後にもあることがわかる。数字の減少は当然予想されることであるが、家族に教師がない学生の場合に、かえって実習を受けることによって増加している場合が多いことは無視できない。

表5 家族の状況×教職志望の強さ（I→II）

	親に教師がいる(13)	兄弟姉妹に教師がいる(27)		親や兄弟姉妹に教師がない(16)			
		いる(13)	いない(14)	いる(27)	いない(22)	いる(31)	いない(18)
浪人しても教職につきたい	I	9	16	18	7	20	5
	II	8	19	19	8	20	7
卒業後通信教育を受けたい	I	10	15	17	8	19	6
	II	6	13	14	5	15	4

数字は実人数

それにしても教職課程履修理由に関して、「教師になりたいから」に「はい」と答えた学生が84.3%（43/51）もいながら、そのうち採用試験の準備をしている者が65.1%（28/43）しかいないのは問題である。

表6 教職課程履修決定の時期（調査Ⅰから）

	大学入学後	高校(浪人)時代	高校入学以前	大学卒業後
計 (51)	41.2 (21)	41.2 (21)	17.6 (9)	0
男女別	男 (34)	41.2 (14)	38.2 (13)	20.6 (7)
	女 (17)	41.2 (7)	47.1 (8)	11.8 (2)
学年別	E (14)	57.1 (8)	28.6 (4)	7.1 (2)
	S (33)	30.3 (10)	48.5 (16)	21.2 (7)
家族の状況	B (4)	75.0 (3)	25.0 (1)	(0)
	親や兄妹に教師がいる(31)	45.1 (14)	32.3 (10)	22.6 (7)
	家族に教師がない(20)	35.0 (7)	55.0 (11)	10.0 (2)

教職課程の履修を決めた時期を示すのが表6である。男女とも平均41.2%の学生が、大学入学後に履修を決定しており、「開放制」の利点はまさにここにある。「大学卒業後」という項目は聴講生のために設定したが実際には0であり、彼らのうち4人は「大学入学後」、1人は「高校

入学以前」であった。学部別に見ると、社会学部の69.7% (23/33) が大学入学前に履修決定していたのが、経済学部の35.7% (6/14) に比べ目立っている。また家族に教師を持たない学生のほうが持つ学生よりむしろ、大学入学前に履修決定している率が高い。

3. 教職観の変化

当初抱いていた教職観が、教育実習を経験することによって何らかの変化を見せるかどうか。始めに一般的な教職観についてみてみる。表7からわかるように、調査Iで80%以上の多くの学生の同意を得たのは、c「経済的安定」、d「やりがい・働きがい」、e「苦労が多い」である。特にdは、I IIを通じてほとんど全員の一致する項目である。Iでdに不同意を示したのは女子2名(ともに「あまりそう思わない」)であるが、彼女らも調査IIでは、「全く同感」と「まあそう思う」に変化している。調査IIでdに「あまりそう思わない」と答えた男子2名は、Iでは「全く同感」であった。

全体として実習の前後において、教職観の大きな変化はない。実習前に描いていた予測が、だいたいにおいて当っていたということである。IとIIの間で大きな変化を示しているのはeであるが、これは質問を「苦労が多い」から「苦労が多いわりに報われない」に変えたためであろう。「苦労が多いがやりがいがある」との学生たちの教職観を正確に示している。

実習後に「どちらとも思わない」が、ほとんどどの項目でも増加しているのは、現場内部に入ることによってかえっていちがいに判断できなくなることが多いことの表れであると考えられる。

男女間における相違について調べてみると、いくつかの点が指摘できる。まず調査Iで、a～hの教職観のうち特にそうだと思う項目を一つ選んでもらったところ、男子では「やりがい・働きがい」に73.5% (25/34) が集中したのに対し、女子では「経済的安定」と「やりがい・働きがい」との間で、それぞれ35.3% (6/17), 41.2% (7/17) と分かれた。

表7 実習による教職観の変化

N= I 51 II 54

		(1)全く同感 (2)まあそう思う	(3)どちらとも思わない	(4)あまりそう思わない (5)全く違うと思う
	I	58.8 (30)	7.8 (4)	33.3 (17)
a. 社会的に高い評価を受けている	II	53.7 (29)	24.0 (13)	22.2 (12)
b. 高給与である	I	29.4 (15)	17.6 (9)	52.9 (27)
	II	22.2 (12)	35.2 (19)	42.6 (23)
c. 経済的に安定している	I	88.2 (45)	9.8 (5)	2.0 (1)
	II	77.7 (42)	16.7 (9)	5.6 (3)
d. やりがい・働きがいがある	I	96.1 (49)	(0)	4.0 (2)
	II	94.4 (51)	1.9 (1)	3.7 (2)
e. 苦労が多い	I	86.3 (44)	5.9 (3)	7.8 (4)
e. 苦労が多いわりに報われない	II	35.2 (19)	16.7 (9)	48.1 (26)
f. 楽である	I	4.0 (2)	5.9 (3)	90.2 (46)
f. 楽ではあるが単調である	II	1.9 (1)	5.6 (3)	92.6 (50)
g. 軽蔑されている	I	(0)	7.8 (4)	92.2 (47)
	II	1.9 (1)	14.8 (8)	83.3 (45)
h. 女性にとって恵まれている	I	43.1 (22)	35.3 (18)	21.6 (11)
	II	48.1 (26)	18.5 (10)	33.3 (18)

表8 実習による教職観の変化（男女別）

N= I 男34, 女17 II 男34, 女20

		(1) 全く同意 (2) まあそう思う		(3) どちらとも思わない		(4) あまりそう思わない (5) 全く違うと思う	
		男	女	男	女	男	女
a. 社会的に高い評価を受けている	I	67.6 (23)	41.2 (7)	8.8 (3)	5.9 (1)	23.5 (8)	52.9 (9)
	II	70.6 (24)	25.0 (5)	20.6 (7)	30.0 (6)	8.8 (3)	55.0 (11)
b. 高給与である	I	32.4 (11)	23.5 (4)	14.7 (5)	23.5 (4)	52.9 (18)	52.9 (9)
	II	14.7 (5)	35.0 (7)	38.2 (13)	30.0 (6)	47.1 (16)	35.0 (7)
h. 女性にとって恵まれている	I	32.4 (11)	64.7 (11)	41.2 (14)	23.5 (4)	26.5 (9)	11.8 (2)
	II	35.3 (12)	70.0 (14)	23.5 (8)	10.0 (2)	41.2 (14)	20.0 (4)

表8が示すように、実習前に教職が「社会的に高い評価を受けている」と考えている学生の率は男子のほうが高く、実習後その男女差はさらに拡大している。実習前、男女とも半数以上の学生は、教職は「高給与である」に否定的に考えている。ところが実習後男子の場合、「どちらとも思わない」が増加し、肯定的回答も半減しているが、女子の場合むしろ実習後、肯定的回答が増えている。「女性にとって恵まれている」は、実習後「どちらともいえない」が唯一減少した項目であるが、実習前後を通じて女子に男子の倍の率で肯定的回答が多い。

上記a～h以外に、実習を通じて特に強く思ったことを自由記述してもらったが、その中には次のようなものがあった。

- ・職場を離れても規制されることが多い（中学校・女子）
- ・テクニシャンであることが要求される（中学校・男子）
- ・完全な男女平等とはいえない中で、教師は女性にとっても自分のやりがいを見いだすことができる職業である（中学校・女子）。
- ・人間の成長に関わる仕事であるため、それだけ責任と強い信念が必要である。大前提として信頼関係になければならない。可能性を信じていくことが大切である（中学校・女子）。
- ・チョークの粉を食べるようなもの（高校・男子）。
- ・あらゆる面で生徒に対して失敗は許されない。教師の一言が生徒の心を大きく歪めるこ

ともあるのではないか（中学校・男子）。

・外から見ているほど、なまやさしいものではない（高校・男子）。

・楽をしようと思えば、これ程楽な仕事はない。がんばればがんばる程、苦労と働きがいが生まれる（中学校・女子）。

・人間相手のため、その日その日によって変化のある仕事である。それだけにしっかりとした職業意識が必要である（中学校・女子）。

・現在、校内暴力を起こす前に、上から力でもって生徒をしばっているような面がみられるが、こういう社会こそ生徒とのコミュニケーションが大事である（中学校・男子）。

・生徒の存在がいつもあるということで、自分の仕事であると同時に、自分だけの問題ですまされない（中学校・女子）。

・一人の人間として生徒という人間に何かを教え、そして人間形成する。しかもそれはそのクラス全員に対して平等に行なわれなければならない難しさがよくわかった（高校・女子）。

・自分によほどの信念というべきものがないとできない（中学校・男子）。

次にとりあげるのは、「最近の教師について」の、実習前後における意識の変化である。「はじめに」でのべたようなこの調査のもともとの意図からすると、これは極めて重要な項目の一つである。結果は表9が一目瞭然のごとく示すように、実習前に学校教師に対して抱かれていた否定的評価が、実習を体験することによってすべての項目において大きく好転しているので

表9 「最近の教師」について

N= I 51 II 54

		(1)全く同感 (2)まあそう思う	(3)どちらとも思わない	(4)あまりそう思わない (5)全く違うと思う
a. 学力不足の教師が多い	I	25.5 (13)	27.5 (14)	47.1 (24)
	II	16.7 (9)	26.0 (14)	57.4 (31)
b. 教え方の下手な教師が多い	I	45.1 (23)	29.4 (15)	25.5 (13)
	II	29.6 (16)	27.8 (15)	42.6 (23)
c. 熱心な教師が多い	I	15.7 (8)	33.3 (17)	51.0 (26)
	II	51.9 (28)	22.2 (12)	26.0 (14)
d. 信頼できる教師が多い	I	15.7 (8)	37.3 (19)	47.1 (24)
	II	48.1 (26)	29.6 (16)	22.2 (12)
e. 生徒の立場や気持ちを理解してくれる教師が多い	I	7.8 (4)	27.5 (14)	64.7 (33)
	II	37.0 (20)	31.5 (17)	29.6 (16)
f. いわゆる偏差値教育を煽る教師が多い	I	74.5 (38)	15.7 (8)	9.8 (5)
	II	31.5 (17)	22.2 (12)	46.3 (25)
g. 差別やえこひいきをする教師が多い	I	27.5 (14)	31.4 (16)	41.2 (21)
	II	13.0 (7)	18.5 (10)	63.0 (37)

ある。性別にも分析してみたが、男女ともに同じ傾向が出ていた。

これは、自分の主観的体験やマスコミその他その他律的情報によって抱いていた先入観が、自分自身が現場に入り教師と身近に接し、自ら教える立場に立つことによって打ち砕かれていたことを意味していると考えてよいであろう。まさにここにこそ教育実習の持つ第二の、つまり父母・社会人の「一般教養」としての意義があるのである。たとえ、「免許状取得者数に比べ就職者数が余りにも少ないと」が「教員養成に対する努力と効果について関係者の間に疑問を持たせることとな」り、「実習生の受け入れについて実習校を消極的にさせ、実習校の教員に後継者を育成しようという意欲を失わせる原因ともなる」のが事実としても（教養審教育実習専門委員会「教育実習の改善充実について」1978年9月），教育実習が学校教師へのよき理解者を生みだすよい機会であることもまた否定できないのである。

「最近の教師」について、a～g以外に特に強く感じたことを自由に記述するようIIで求めたところ、以下のような回答があった。

・教師にとっては毎年同じことの繰り返しで

あっても、生徒にとってはその一年だけしかないことを自覚しなければならない（高校・女子）。

・社会全体の風潮として、受験にかたよった教育が目立ち、ショック（高校・男子）。

・生徒の多様化にともない、非常に苦労している（高校・男子）。

・生徒の身体的悪口をのべたり、「バカ」という言葉を使う教師の存在を知り、いかりをおぼえた。教師は一言一言に責任を持ってほしい（中学校・男子）。

・保身に終始する教師が多く、日本の将来を憂う（高校・男子）。

・私の担当教師は大変熱意のある教師だったが、すべてがそういうわけではなかった（中学校・女子）。

・確かに生徒指導に熱心な先生がいるのに感動した（中学校・男子）。

・学生の時は学力不足、教え方が下手な教師が多いと思っていたが、実習をやってみて各先生なりにがんばっていると思った（中学校・男子）。

・教職のみに生きている先生が思ったより多いのに驚いた（中学校・女子）。

4. 実習目的の達成

教育実習の目的として考えられうる6項目のそれぞれについて、調査Iでは同意できるかどうかを質問し、IIではそれぞれについての達成度を尋ねたが、それをまとめたのが表10である。調査Iで最も多くの同意を集めたのは、「将来、教師になった時の準備や練習」の72.5% (37/51) であったが、IIでは「一般的社会体験」の90.7% (49/54) となっている。肯定が大幅に増加し否定が減少したもの、つまり当初考えていた以上によく目的達成できたものに、「教師としての適否」、「将来の社会人・親として」、

そして「一般的社会体験」がある。教育実習の積極的意義がここにも見られる。

なお特に男女で差がみられるのは(表11参照)「理論の応用」と「教授技術」であり、ともに男子は実習後肯定が増加しているのに対し、女子では減少している。

a～f以外の独自の実習成果として自由記入された回答には、次のようなものが含まれていた。

- ・自分の生き方などについて考えるようになった(高校・女子)。
- ・魅力ある人達と知りあいになったこと(中学校・女子)。

表10 教育実習の目的について(I) 達成度 (II)

N= I 51 II = 54

		(1) 全くその通りだ 充分達成できた (2) まあそうだ だいたい達成できた	(3) わからない わからない	(4) 少しう あまり達成できなかった (5) 全く違 全く達成できなかった
a. 将来、教師になった時の準備・練習	I	72.5 (37)	3.9 (2)	23.5 (12)
	II	57.4 (31)	24.1 (13)	18.5 (10)
b. 自分が教師に適しているかどうか確かめること	I	52.9 (27)	9.8 (5)	37.3 (19)
	II	83.3 (45)	14.8 (8)	1.9 (1)
c. 大学で学んだ理論面を応用したり、理論通り行かない実践の体験	I	62.7 (32)	13.7 (7)	23.5 (12)
	II	64.8 (35)	1.9 (1)	33.3 (18)
d. 将来の社会人・親として、教師の仕事を理解したり、学校の実態や問題点を知ること	I	43.1 (22)	7.8 (4)	49.0 (25)
	II	87.0 (47)	1.9 (1)	11.1 (6)
e. 一般的社会経験として、自分の視野を広くすること	I	45.1 (23)	9.8 (5)	45.1 (23)
	II	90.7 (49)	9.3 (5)	(0)
f. 教授技術の習得	I	49.0 (25)	7.8 (4)	43.1 (22)
	II	42.6 (23)	13.0 (7)	44.4 (24)

表11 教育実習の目的について(I) 達成度 (II) 男女別 N= I 男34, 女17 II 男34, 女20

		(1) (2)		(3)		(4) (5)	
		男	女	男	女	男	女
c. 大学で学んだ理論面を応用したり、理論通り行かない実践の体験	I	55.9 (19)	76.5 (13)	17.6 (6)	5.9 (1)	26.5 (9)	17.6 (3)
	II	70.6 (24)	55.0 (11)	2.9 (1)	(0)	26.5 (9)	45.0 (9)
f. 教授技術の習得	I	41.2 (14)	64.7 (11)	11.8 (4)	(0)	47.1 (16)	35.3 (6)
	II	52.9 (18)	25.0 (5)	14.7 (5)	10.0 (2)	32.4 (11)	65.0 (13)

- ・教科指導優先論対生徒指導優先論の決着（中学校・男子）。
- ・自己の成長、自分自身をみなおすことにつながった（中学校・女子）。
- ・生徒は教師の行動を冷静にみており、教師の努力によって生徒は大きく伸びる（中学校・男子）。
- ・人を理解させる、わからせるということの難しさ（高校・男子）。
- ・生徒は教師との接触を求めている（高校・男子）。

・物事を理論だてて考えることができるようになった（中学校・女子）。

・自分自身に自信が持てた（中学校・女子）。教えることに対する興味が、実習を経ることにより増すか減るかは大きな問題であるが、それを調べたのが表12である。全体として実習前後を通じ大半のものが興味を持っているが、男女とも興味や魅力を「おおいに感じる」が増加している。

特定できた49名について実習前から後の個別変化を分析したのが表13である。実習前には

表12 教えることへの興味

N = I 男34, 女17 II 男34, 女20

		(1) おおいにある おおいに感じる	(2) ある 感じる	(3) わからない わからない	(4) あまりない あまり感じない	(5) 全くない 全く感じない
教える事に興味がありますか	I	31.4 (16)	58.8 (30)	9.8 (5)	(0)	(0)
実習後の現在、教えることに興味や魅力を感じていますか	II	50.0 (27)	38.9 (21)	7.4 (4)	1.9 (1)	1.9 (1)
内 訳	男 I	41.2 (14)	55.9 (19)	2.9 (1)		
	男 II	64.7 (22)	26.5 (9)	2.9 (1)	2.9 (1)	2.9 (1)
	女 I	11.8 (2)	64.7 (11)	23.5 (4)		
	女 II	25.0 (5)	60.0 (12)	15.0 (3)		

表13 教えることへの興味（個別変化） N=49

II \ I	(1) おおいにある 15	(2) ある 29	(3) わからない 5
(1) おおいに感じる 27	10	17	
(2) 感じる 16	4	8	4
(3) わからない 4		3	1
(4) あまり感じない 1	1		
(5) 全く感じない 1		1	

I から II へ実入数の変化

教えることに興味を持ちながら、実習後持たなくなった学生が2名いる一方、Iで興味が「ある」と答えた29名のうち17名が、IIでは「おおいに感じる」に変化していったこともわかる。

調査Iでは漠然と子どもが好きかどうか尋ねIIでは具体的に、実習期間中、中学生や高校生に好感を持てたかどうかを尋ねた。もちろん質問内容が異なっているのであるが、これを比

表14 子どもが好きか（I）、中・高校生への好感（II）

N = I 51, 男34, 女17 II 54, 男34, 女20

		(1) 大好きである おおいに持てた	(2) 好きな方である まあ持てた	(3) どちらでもない どちらともいえない
自分としては子どもが好きですか	I	23.5 (12)	56.9 (29)	19.6 (10)
実習期間中、中・高校生に好感を持てましたか	II	61.1 (33)	35.2 (19)	1.9 (2)
内 訳	男 I	29.4 (10)	55.9 (19)	14.7 (5)
	男 II	67.6 (23)	29.4 (10)	2.9 (1)
	女 I	11.8 (2)	58.8 (10)	29.4 (5)
	女 II	55.0 (10)	45.0 (9)	5.0 (1)

表15 子どもが好きか(I), 中・高校生への好感(II)
(個別変化) N=49

	(1) 大好きである 12	(2) 好きな方である 28	(3) どちらでもない 9
(1) おおいに持てた 31	9	17	5
(2) まあ持てた 16	2	11	3
(3) どちらともいえない 2	1		1

べているのが表14である。I IIとも否定的回答は0であり、男女ともIIの「おおいに持てた」が多くなっている。表15はその個別変化である。

教育実習の重要な意義の一つは、自分が果して教職にむいているかどうかを検定することであった。ただ何となく「適している」とする思い込みが試され、逆にあまり意識されていなかった自己の潜在的な適性が発見される場もある。教師に要求される不可欠の資質に、「他者の心の動きを鋭敏に感じ取り、他者のために、そのつどの具体的な状況に相応しい適切な事柄を

即座に判断する力」であり、「他者を傷つけることを微妙に回避する繊細さや控え目」である「教育的タクト」がある(竹中・中山・田中・徳永『人間性追究の教育学』昭和堂、1983年、145頁参照)。この能力はもちろん、教職についてから後の努力の積み重ねで身につけていくこともできるであろうが、しかし少なくとも「教育的タクト」の発揮を要求される場面に直面させられた時に、「前むき」の姿勢をとりうるかどうか、それともそういう場に嫌悪感を催すかどうかは、教職者としての重大な岐路である。そしてこの検定の場は、実習以外にはない。

表10すでに示したように、83.3%の学生たちが、自分が教師に適しているかどうか確かめられたと回答している。しかもしもその適否の判断に実習の前と後とで大きな異同がなかったとしたら、学生たちの当初の自己診断が極めて正確であったということか、あるいは教育実習

表16 教師にむいているかどうか N= I 51, 男34, 女17 II 54, 男34, 女20

		(1) おおいにそう思う おおいにそう思った	(2) むいている まあそう思った	(3) わからない どちらともいえない	(4) あまりむいていない あまり思わなかった	(5) 全くむいていない 全く思わなかった
性格的に教師にむいていると 思いますか	I	9.8 (5)	27.5 (14)	39.2 (20)	21.6 (11)	2.0 (1)
実習に行ってみて、性格的に 教師にむいていると思いましたか	II	14.8 (8)	50.0 (27)	14.8 (8)	11.1 (6)	9.3 (5)
内 説	男	I 11.8 (4)	38.2 (13)	44.1 (15)	5.9 (2)	(0)
	II	23.5 (8)	52.9 (18)	14.7 (5)	5.9 (2)	2.9 (1)
	女	I 5.9 (1)	5.9 (1)	29.4 (5)	52.9 (9)	5.9 (1)
	II	(0)	45.0 (9)	15.0 (3)	20.0 (4)	20.0 (4)

表17 教師にむいているかどうか(個別変化) N=49

II	I	(1) おおいに そう思う 5	(2) むいている 方である 13	(3) わからない 19	(4) あまりむいて いない 11	(5) 全くむいて いない 1
(1) おおいにそう思った 8	4	3	1			
(2) まあそう思った 26	1	5	14	6		
(3) どちらともいえない 6		3	2	1		
(4) あまり思わなかった 6		2	1	3		
(5) 全く思わなかった 3			1	1	1	

が適否検定の場であるとする前提そのものが誤っていたかである。今回の調査の結果では、表16および表17のようになった。

表16から、全体として実習後、「わからない」「あまりむいていない」が大きく減少して、他の項目、とりわけ「まあそう思った」が大きく増加したことがわかる。けれども肯定的回答はⅠⅡを通じて男子のほうにはるかに多く、特に実習前に女子の肯定的回答は2人しかなく、17人中10人までが(58.8%)「むいていない」と考えていた点がめだっている。

個別変化を示す表17は、Ⅰの「おおいにそう思う」5名と「全くむいていない」1名とはだいたい予想が当たったが、他の回答者の場合、自己診断は実習体験によって変容したケースが多いことを表わしている。特に「わからない」の19名中14名、「あまりむいていない」の11名中6名が、「まあそう思った」と答えている点に注目しなければならない。

実習に行く前、実習に不安を感じるのは当然であろう。調査Ⅰでも、男子に「あまり感じない」1名、「全く感じない」2名があっただけで、残りは「非常に感じる」32名、「少し感じる」16名であった。では彼らは、特にどういう点に不安を強く感じ、そして実際には一番困ったのはどういう点であつただろうか。特定できた49名についてこのことを調べたのが表18である。

表18 不安な点(I), 困った点(II) (個別変化)
N=49

	I	(1)教科の知識面 12	(2)教授技術面 (教案づくりを含む) 14	(3)人前でしゃべること 8	(4)生徒指導面 7	(5)指導教諭との関係 2	(6)なんどなくついて 17	(7)不安を感じない 3
(1)教科の知識面	5	2	1	3	1	0	5	1
(2)教授技術面 (教案づくりを含む)	9	3	3	2	1		5	1
(3)人前でしゃべること	5	1	1	1			3	1
(4)生徒指導面	3	2			1			1
(5)指導教諭との関係	0						1	
(6)その他	17						4	1
(7)特に困ったことはなかった	3							

註 Iが(6)の回答者の1人は：IIで(1), (3)と、またIが(1)の回答者の1人はIIで(1)～(4)と回答。

これを見ると、事前に不安に思うことと、実際に困ったこととはあまり一致しないことがわかる。「特に困ったことはなかった」の8名中、7名は男子である。「その他」2名の回答は次の通りであった。

- ・ただ教科書のとおり事項の説明をするだけでは誰が授業をしても同じであるので、その授業をとうして自分の人生観・教育観などをあらわせるように要求されたという点(高校・女子)。

- ・生徒一人一人の反応を見ながら働きかけること(養護学校中等部・女子)。

実習の期間(2週間)について始め抱いていた考えが、実習後どのように変化したか、これを示すのが表19である。「ちょうどよい」「わからない」が大きく減少して、その分「短かすぎ」が増加している。実習にそれだけの重い価値が見出しえたからであろう。調査Ⅱで、「教育実習をふりかえってみて、全体としてどう思いますか」との問に対して、「大変有意義であった」を選んだ学生は46名、85.2%もあった(「まあ意義があった」は6名、11.1%，残り2名は「何ともいえない」)。しかし実習期間の延長は二重登録や実習時期の問題とも絡んで、一般大学における教職課程的一大争点となっている。

表19 教育実習の期間2週間にについて
N=Ⅰ51男34, 女17 Ⅱ54男34, 女20

		(1)ちょうどよい	(2)短かすぎる	(3)長すぎる	(4)わからない
	I	33.3 (17)	27.5 (14)	2.0 (1)	37.3 (19)
	II	20.4 (11)	66.7 (36)	1.9 (1)	11.1 (6)
内 男	I	32.4 (11)	35.3 (12)	(0)	32.4 (11)
	II	14.7 (5)	76.5 (26)	2.9 (1)	5.9 (2)
訳 女	I	35.3 (6)	11.8 (2)	5.9 (1)	47.1 (8)
	II	30.0 (6)	50.0 (10)	(0)	20.0 (4)

調査Ⅱで、出身校実習についての賛否を聞いたところ、賛成33(61.1%), 反対2(3.7%), どちらともいえない15(27.8%), わからない4(7.4%)という結果になった。賛成の理由は要するに、学校や生徒の実態がよくわかっていて、彼らとその地域の話がよくできる、指導教諭が親身、家から近い、自分の在学時と比較できる、といったことである。反対理由は、指導教諭と

の間が慣れ合いになりやすい、その中に非出身者が入ると「すべての面で不利」になる、であった。「どちらともいえない」は、この両者の間で揺れるからであるが、他に次のような意見があった。

- ・利点はいっぱいあるが、欠点は日常生活を生徒や父母に知られていること（中学校・男子）。
- ・普通校以外に行くのも、また違った面を見ることができる（養護学校中等部・女子）。

5. 教職志望意思への影響

最後に、実習体験が教職志望の意思にどのような影響を与えたか、という問題についてみてみることにする。国公私立の学校教員、塾教師になりたいか、教職には就きたくないか、という質問的回答をまとめると、表20のようになる。

表20 教職に就きたいかどうか
N= I 51, 男34, 女17 II 54, 男34, 女20

		学校教員	塾教師	就きたくない	NA
I		86.3 (44)	(0)	9.8 (5)	3.9 (2)
II		83.3 (45)	—	14.8 (8)	1.9 (1)
内 男	I	91.2 (31)	(0)	5.9 (2)	2.9 (1)
	II	94.1 (32)	—	2.9 (1)	2.9 (1)
訳 女	I	76.5 (13)	(0)	17.6 (3)	5.9 (1)
	II	65.0 (13)	—	35.0 (7)	(0)

全体としてみればほとんど変化はないが、女子の「就きたくない」の増加が目につく。特定できた49名について調べると、42名の教職志望者の中から2名の「就きたくない」とNA 1名が出て、他方5名の「就きたくない」から2名の志望者が生まれている。調査IIの回答者の中には、採用試験後に実習を行ったものが12名含まれているが、うち「就きたくない」と答えたものは1名のみであり、採用試験後になれば教職志望率は低下する、とはいえない。

表16（教師への適否）における否定的回答者11名（調査II）について、その教職志望意思を調べてみると、教師にむいていと「あまり思わなかった」学生6名のうち4名は、なお教職に就きたいと答え、「全く思わなかった」学生5名の中からも1名の志望者がでている。

表21 教職にはどの程度つきたいか
N= I 44, 男31, 女13 II 45, 男32, 女13

		(1)卒業と同時に採用されれば	(2)1~2年かかる	(3)数年間かかる	NA
内 男	I	43.2 (19)	34.1 (15)	22.7 (10)	
	II	35.6 (16)	35.5 (16)	26.7 (12)	(1)
訳 女	I	45.2 (14)	32.3 (10)	22.6 (7)	
	II	40.6 (13)	31.3 (10)	25.0 (8)	(1)
訳 女	I	38.5 (5)	38.5 (5)	23.1 (3)	
	II	23.1 (3)	46.2 (6)	30.8 (4)	

表22 教職にはどの程度つきたいか(個別変化) N=42

		I	(1)採用されると同時に	(2)1~2年かかる	(3)数年間かかる
		II	17	15	10
(1)卒業と同時に採用されれば	12	9	3		
(2)1~2年かかる	16	6	8	2	
(3)数年間かかる	11	1	4	6	
NA	3	1		2	

表23 卒業後、通信教育を受けようと思っているか
N= I 51, 男34, 女17 II 54, 男34, 女20

		小学校免許 (1)取得のため受けたい	他教科免許 (2)取得のため受けたい	(3)受けるつもりはない	NA
内 男	I	41.2 (21)	9.8 (5)	45.1 (23)	(2)
	II	33.3 (18)	5.6 (3)	55.6 (30)	(3)
訳 女	I	47.1 (16)	14.7 (5)	32.4 (11)	(2)
	II	35.3 (12)	5.6 (3)	47.1 (16)	(3)
訳 女	I	29.4 (5)	(0)	70.6 (12)	(0)
	II	30.0 (6)	(0)	70.0 (14)	(0)

教職志望の強さについて知るための設問をしたが、表21はその結果である。志望者の56.8%が浪人覚悟であり、しかも実習後その率はやや高まっていることがわかる。特定できた志望者42名の個別変化は表22で示している。

卒業後に他の教員免許取得のため、通信教育を受けようと思っている学生はどのくらいいるか、これを調べたのが表23である。実習後やや減少するのは当然としても、それでもなお男子の44.1%、女子の30%は、通信教育を受けたいという強い教職志向を持っているのである。

**表24 教員免許を次のような形で活用したい
N= I 51, 男34, 女17 II 54, 男34, 女20**

		a.学校の非常勤講師	b.塾の教師	c.家庭教師	d.各種施設やサークルのボランティア
I	76.5 (39)	33.3 (17)	29.4 (15)	—	
	II 79.6 (43)	29.6 (16)	31.5 (17)	46.3 (25)	
内訳	男 I	73.5 (25)	35.3 (12)	29.4 (10)	—
	II	79.4 (27)	14.7 (5)	14.7 (5)	41.2 (14)
	女 I	82.4 (14)	29.4 (5)	29.4 (5)	—
	II	80.0 (16)	55.0 (11)	60.0 (12)	55.0 (11)

註 各項目ごとの「はい」の比率および実数

学校の教員に正式にならなかった場合であっても、教員免許を活かす道は他にもある。教職志向の程度をさらに探るために、「卒業後、もし可能ならば次のような形で教員免許を活用したいと思いますか」と尋ねたが、それぞれの項目に「はい」と答えた学生比率数は表24のとおりである。

全体的には実習前後で大きな変化はないが、「塾の教師」「家庭教師」が男子において半減し、逆に女子の場合倍増しているのが目につく。それはともかく、免許を何らかの形で活用したいと願っている学生たちはかなり多い。

現在、学校教育は現職学校教員だけによってほぼ独占されている、けれども一般社会人や職業人が、彼ら独自の知識や技術・経験を披露するために、臨時に教壇に立つことの教育的意義も大きく、今後そういう機会ができるだけ多く作られてしかるべきである。またアメリカなどでもよく見られるように、主婦を中心としたボランティアが、生徒たち一人一人にきめ細かな指導ができるように学校教師を手助けするという活動の場も必要なことである。

とすれば、地域の学校からの要請があった時に、それに応じえる優れた人材を提供できる層、つまりペーパー・ティーチャーの層が厚くなっていくことは、決して好ましくない現象などではなく、むしろたいへん望ましいことであるといえるのである。

おわりに

以上、アンケート調査の結果に基づいて、教

表25 本学での教員免許取得者数（聴講生は含まない）

年 度	学部	履 修 者 数 (4回生以上)	教育実習生数	免許取得者数
1982	E	16 (3)	12 (3)	12 (3)
	S	45 (16)	35 (15)	31 (13)
	B	5 (2)	4 (2)	3 (1)
	計	66 (21)	51 (20)	46 (17)
1981	E	24 (2)	18 (2)	16 (2)
	S	63 (11)	47 (10)	45 (10)
	B	12 (1)	7 (1)	7 (1)
	計	99 (14)	72 (13)	68 (13)
1980	E	38 (1)	33 (1)	29 (1)
	S	46 (14)	40 (13)	31 (12)
	B	9 (2)	8 (2)	6 (2)
	計	93 (17)	81 (16)	66 (15)
1979	E	34 (4)	23 (4)	23 (4)
	S	49 (16)	34 (14)	33 (14)
	B	8 (5)	8 (5)	8 (5)
	計	91 (25)	65 (23)	64 (23)
1978	E	32 (3)	23 (3)	18 (2)
	S	78 (27)	59 (24)	51 (20)
	B	18 (1)	13 (1)	12 (1)
	計	128 (31)	95 (28)	81 (23)
1977	E	57 (5)	47 (5)	29 (5)
	S	89 (34)	68 (29)	47 (18)
	B	11 (3)	9 (3)	7 (3)
	計	157 (42)	124 (37)	83 (21)
1976	E	53 (2)	42 (2)	24 (1)
	S	139 (46)	116 (45)	51 (24)
	B	11 (3)	9 (3)	6 (3)
	計	203 (51)	167 (50)	81 (28)
1975	E	52 (4)	42 (4)	29 (4)
	S	90 (37)	80 (35)	58 (29)
	B	—	—	—
	計	142 (41)	122 (39)	87 (33)

() は女子内数

村中学務課員作成

育実習の前と後における学生たちの意識変化についてのべてきた。その中で特に重要であると考えられるのは、実習体験が、学校や教師に対する彼らの否定的先入観を打ち碎いて、学校や教師に対するよき理解者・協力者につくり変える可能性を持っているのではないか、ということであった。

けれども教育実習のこの意義、いわば将来の社会人・親としての「一般教養」に注目しようとするのは、教員養成を一般大学から閉め出し

目的養成化しようとする動きに反対するからであって、一般教養的意義があるからどんな学生でも教育実習に送り込んでよい、などと主張するためでは決してない。

ところで本学での教員免許取得者数は、表25からわかるように7年前のやく半分に減少している。これには採用試験の困難度が全国的に年々高まってきていることが一番強く影響していると考えられるが、その他に1978年度から教育実習履修要件を厳格に適用し始め、1979年度からは同和教育論を必修化して必要単位数を増加させたことも関係しているかも知れない。

けれどもこうした措置は、一人でも多く実力と熱意ある適切な実習生を生みだすためのもの

であったはずであり、決してただ実習生を減らしもって実習公害論をかわすためのものではなかったはずである。従って免許取得者(実習生)の減少は、潜在的教職者の層を厚くする視点からして、喜ばしいことでは全くないのである。

今回の調査では、教職課程履修者の中に、極めて強い教職志望の学生たちが多く含まれていることも明らかとなった。実習の後においても、実習生の半数は浪人覚悟で教職を志望しており、また40%近くは、小学校や他教科の免許のための通信教育受講を望んでいた。これらが決して単なる希望でないことは、表26・27が雄弁に示すところである。学生たちのこのような熱意にいかに応えていくかは、われわれに負わされた

表26 大阪府・市教員採用試験受験者数(本学関係)

実施年	小学校			中学校			高校			総計
	在学生	卒業生	計	在学生	卒業生	計	在学生	卒業生	計	
1982	1*	52	53	12	29	41	10	21	31	125
1981	1*	72	73	27	22	49	8	19	27	149
1980	—	73	73	19	19	38	23	13	36	147
1979	—	70	70	9	20	29	27	18	45	144

* 小学校教員資格認定試験を受験した上での受験者である

表27 1982年実施大阪府・市教員採用試験受験者卒業年別内訳(本学関係)

卒業年	小学校	中学校	高校	計
1983	1	12	10	23
1982	7	7	5	19
1981	3	5	3	11
1980	6	4	2	12
1979	8	5	3	16
1978	7	0	3	10
1977	6	2	1	9
1976	6	0	0	6
1975	6	4	1	11
1974	2	0	2	4
1973	1	0	1	2
1972	0	1	0	1
1967	0	1	0	1
計	53	41	31	125

重い課題である。

アンケートの最後に書いてもらった自由意見では、実習前の訓練や教職課程教育の一層の強化・厳格化を求める声も多かった。具体的にどのようにするか、今後真剣に考えていきたい。

けれどもここで重要なのは、教職課程教育の強化とは何か、ということである。なぜなら、教職課程とは、学部(学科)教育の全体を前提に、その学部(学科)に認定されているからである。一般大学における資格課程全般についていえることであるが、教員養成もまた、大学教育のすべてを通じてこそ行なわれる所以である。一般教育・専門教育の確固たる主柱なくしては教職教育など空中に浮かんだ実体のない蜃気楼にすぎない。教職課程教育というものは、学部教育とは別個に単独に存在しうるものではない。従って、教職課程教育の強化というのは、決してひとり教職専門科目の強化だけで達成できる

教職課程履修学生の意識調査(I)

【7】教職課程履修の動機・理由は何ですか。

〔1〕以下のそれについて答えて下さい。

- a. 教員になりたいから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 b. 教育や教育問題などに関心があるから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 c. 教員免許を持っていると就職や結婚に有利だと思うから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 d. 将来、自分の子どもの教育に役立つと思うから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 e. 大学での学習目標がはっきりするから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 f. 他の人が勧めるから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 g. 資格など持っている人は何でもとらないと相だから
 (1) はい (2) いいえ (3) どちらともいえない
 (2) 上記の9のなかで最も自分にあてはまるものを一つ選んで下さい。
 []
 あなた個人番号→ [] [] [] [] []

この調査は、本学の教職課程履修学生の意識を統計的に把握していくことによって、教

職課程教育のより一層の充実・改善に資することを目的に行なうものであって、成績評価その他には全く関係がありません。従って思った通り、ありのままに回答して下さい。

回答は特定のものを除き、回答欄に番号または記号で記入して下さい。

【1】何回生ですか。

- (1) 4回生 (2) 5回生以上 (3) 聴講生

[]

【2】性別は。

- (1) 男 (2) 女

[]

【3】学部は。

- (1) 経済学部 (2) 社会学部 (3) 経営学部

[]

【4】あなたの親に学校や塾の教師（すでに退職した人を含む）がいますか。

- (1) 学校教員がいる (いた) (2) 塾教師がいる (いた)

[]

- (3) 両方いる (いた) (4) いない

[]

【5】あなたの兄弟姉妹その他身近なところに、学校や塾の教師（すでに退職した人を含む）がいますか。

- (1) 学校教員がいる (いた) (2) 塾の教師がいる (いた)

[]

- (3) 両方いる (いた) (4) いない

[]

【6】あなたが教職課程の履修をしようと思ったのはいつですか。

- (1) 大学入学後 (2) 高校時代（浪人中を含む）

[]

- (3) 高校入学以前 (4) 大学卒業後

[]

追記

今回の調査だけでは言うまでもなく標本数が少なく不十分である。今後も継続調査が必要である。

- (3) 教職課程履修の動機に影響を与えたと思われる小説や教育関係書、テレビ・ラジオ番組・映画などがありますか。ある場合はその名前も記入して下さい。
 小説・教育書など (1) ある (2) ない
 書名 []
 テレビ・ラジオ・映画など (1) ある (2) ない
 番組名 []
 映画名 []

【8】教師という職業についてどう思いますか。

〔1〕以下のa～hのそれそれについて

- (1) 全く同意である (4) あまりそう思わない
 (2) まあそう思う (5) 全く違うと思う
 (3) どちらとも思わない

と番号で答えて下さい。

- a. 社会的に高い評価を受けている
 b. 高給与である
 c. 経済的に安定している
 d. やりがい・働きがいがある

- e. 苦労が多い
 f. 楽である
 g. 軽蔑されている

- h. 女性にとって恵まれている

〔2〕上記のa～hのなかで、特にそなうだと思ふ項目を一つ選んで下さい。もし適当な
なのがない場合には、下の〔 〕に自由に記入して下さい。

〔1〕最近の教師についてどう思いますか。

- (1) 全く同意である (4) あまりない
 (2) かなりある (5) 全くない
 (3) どちらともいえない

と番号で答えて下さい。

- a. 生徒
 b. 家庭・親
 c. 学校・教師

〔2〕a～c以外にその他があると思う人は、〔 〕に記入して、同じく〔1〕～〔5〕の
番号で答えて下さい。

- (1) 全く同意である (4) あまりそう思わない
 (2) まあそう思う (5) 全く違うと思う
 (3) どちらとも思わない

と番号で答えて下さい。

a. 学力不足の教師が多い

- b. 教え方の下手な教師が多い
 c. 熱心な教師が多い
 d. 信頼できる教師が多い
 e. 生徒の立場や気持ちを理解してくれる教師が多い
 f. いわゆる偏差値教育を煽る教師が多い
 g. 差別やえこひきをする教師が多い

〔2〕上記のa～gのうち、特にそなうだと思ふ項目を一つ選んで下さい。もし適当な
なのがない場合には、下の〔 〕に自由に記述して下さい。

- (1) 以下のa～cのそれそれについて

- (1) 全面的に責任がある (4) あまりない
 (2) かなりある (5) 全くない
 (3) どちらともいえない

〔1〕最近よくいわれる「教育の荒廃」について、どこにその責任があると思いますか。

- (1) 以下のa～cのそれそれについて

〔1〕あなたは教えることに興味がありますか。

- (1) おおいにある (2) ある (3) わからぬ
 (4) あまりない (5) 全くない

〔2〕a～c以外にその他があると思う人は、〔 〕に記入して、同じく〔1〕～〔5〕の
番号で答えて下さい。

- (1) おおいにある (2) ある (3) わからぬ
 (4) あまりない (5) 全くない

【12】自分としては子どもが好きですか。

- (1) 大好きである (2) 好きな方である (3) どちらでもない
 (4) 嫌いな方である (5) 大嫌いである

【13】あなたは自分として性格的に教師にむいていると思いますか。

- (1) おおいにそういう (2) むいている方である (3) わからない
 (4) あまりわいてない (5) 全くわいてない

【14】教職課程のうち教職専門科目（教育原理や教育心理学など）の直点はどうに□か

れるべきだと思いますか。以下の(1)～(5)から2つを選んで下さい。

- (1) 現実の教育諸問題 (2) 多様な考え方を追求する理論的側面
 (3) 教育現場すぐ役立つそうな実践的技術面

- (4) 教員採用試験対策面 (5) 教師にふさわしい総合的教養

【15】(1)以下の教職専門科目を圖示しましたか。

「教育哲学」

- (1) 履修中である (2) 履修済みである (3) していない

「教育史」

- (1) 履修中である (2) 履修済みである (3) していない

「教育社会学」

- (1) 履修中である (2) 履修済みである (3) していない

「教育行政」

- (1) 履修中である (2) 履修済みである (3) していない

【16】(2)これ以外にぜひ必要だと思われる選択科目があれば書いて下さい。

【16】教育実習は、免許状取得に必要だと思いますか。

- (1) 絶対必要である (2) ある程度必要である (3) わからない
 (4) あまり必要でない (5) 全く必要でない

【17】教育実習参加のためには、いくつかの科目を履修済みであることが要求されていますが、このような履修制限についてどう思いますか。

- (1) もっと厳しくすべきである (2) 現在のままでよい (3) もっと緩めるべき
 である (4) 制限する必要はない (5) わからない

【18】あなたの教育実習について。

- a. 種 別 (1) 中学校 (2) 高等学校
 b. 設置者種別 (1) 府県立 (2) 市町村立 (組合立を含む)

【19】(1)教育実習に行くことに不安ですか。

- (1) 非常に感じる (2) 少し感じる (3) わからない
 (4) あまり感じない (5) 全く感じない

【20】(1)教育実習の目的として、以下の○～△のような考え方をどう思いますか。それについて

- (1) 全くその通りだ (4) 少し違う
 (2) まあそうだ (5) 全く違う
 (3) わからない

【21】と番号で答えて下さい。

- a. 将来、教師になつた時の準備や練習のため
 b. 自分が教師に適しているかどうか確かめるため
 c. 大学で学んだ理論面を応用したり、理論通り行かない実践の体験のため

- d. 将来の社会人・親として、教師の仕事を理解したり、学校の実態や問題点を知るために
 68
- e. 一般的な社会経験として自分の視野を広くするため
 69
- f. 教授技術の習得のため
 70
- (2) 上記e～fのなかで、あなたの意見に一番近いのはどれですか。もし適当なのがない場合には、()の中に自由に記入して下さい。
 61

【21】教育実習の期間2週間にについてどう思いますか。

- (1) ちょうどよい (2) 短かすぎる (3) 長すぎる (4) わからない
 62

【22】あなたは、教員免許制度として次のどれが一番望ましいと思いますか。

- (1) 大学で必要な単位数を修得すれば免許を取得できる現在の開放制
 (2) 大学で必要な単位数を履習のうえ文部省あるいは教育委員会の行なう試験に合格した人だけ免許を取得できる制度
 (3) 文部省あるいは教育委員会の行なう試験に合格さえすれば誰でも免許を取得できる制度
 (4) 特定の教員養成機関を修了した人だけが免許を取得できる制度
 (5) 教員採用試験があるのでから、免許制度など必要ない
 (6) わからない
 63

【23】(1) あなたは公立学校教員採用試験についてどのように考えていますか。

- (1) 大変むづかしい (2) 割合むづかしい (3) わからない
 (4) そんなにむづかしくない (5) やさしい
 64

(2) 今年の採用試験を受けるつもりですか。

- (1) そのつもりで準備している。 (2) 準備はしていないが受けれるつもりである。 (3) 受けるつもりはない
 65

【24】(1) あなたは卒業後、教職につきたいという希望を持っていますか。

- (1) 国公立を問わず、とにかく学校教員になりたい
 (2) 特に私立学校教員になりたい (3) 特に公立学校教員になりたい
 (4) 塾の教師になりたい (5) 教職にはつきたくない
 66

(2) (1)～(3)の番号を選んだ人は、どの程度なりたいと思っていますか。

- (1) 卒業と同時に採用されれば (2) 1～2年逸人しても
 (3) 数年間かかるも
 (4) あなたは卒業後、もし可能ならば次のような形で教員免許を副職に活用したいと思いますか。
 67

(3) (1)～(3)の番号を選んだ人は、どの程度なりたいと思いますか。

- (1) 学力 (2) 教授技術 (3) 生徒指導・クラブ指導能力
 (4) 熟意 (5) 人格面 (6) すべての総合評価
 68

- e. 一般的な社会経験として自分の視野を広くするため
 69
- f. 教授技術の習得のため
 70
- (2) 上記e～fのなかで、あなたの意見に一番近いのはどれですか。もし適当なのがない場合には、()の中に自由に記入して下さい。
 61

【24】(1) あなたは卒業後、教職につきたいという希望を持っていますか。

- (1) 国公立を問わず、とにかく学校教員になりたい
 (2) 特に私立学校教員になりたい (3) 特に公立学校教員になりたい
 (4) 塾の教師にはつきたくない
 67
- (2) (1)～(3)の番号を選んだ人は、どの程度なりたいと思っていますか。
- (1) 卒業と同時に採用されれば (2) 1～2年逸人しても
 (3) 数年間かかるも
 (4) あなたは卒業後、もし可能ならば次のような形で教員免許を副職に活用したいと思いますか。
 68

(3) (1)～(3)の番号を選んだ人は、どの程度なりたいと思いますか。

a. 学校の非常勤講師 (1) はい (2) いいえ
 69

b. 塾の教師 (1) はい (2) いいえ
 70

c. 家庭教師 (1) はい (2) いいえ
 71
- (5) あなたは卒業後、教員免許取得のための通信教育を受けようと思っていますか。

(1) 小学校教員免許取得のため受けたい
 (2) 他教科の免許取得のため受けたい
 (3) 受けるつもりはない
 72
- (6) (1) (1)～(3)の番号を選んだ人は、受験しましたか。

(1) 受験したが不合格であった (2) 受験して合格した
 (3) 受験していない
 (4) あなたは文部省が行なう小学校教員資格認定期試験の存在を知っていますか。
 73
- (7) (1) (1)～(3)の番号を選んだ人は、受験しましたか。

(1) (1)～(3)の番号を選んだ人は、受験しましたか。
- (8) あなたは、大阪教育大学(2部)3回生(小学校教員養成課程)への選入試験制度の存在を知っていますか。
- (1) はい (2) いいえ
 74
- | 39 |
- NII-Electronic Library Service

【27】 締口管理制度、免許制度、就職課程などについて何か意見があればありますら、自由に書いて下さい。

教職課程履修学生の意識調査(II)

この調査は、本学の教職課程履修学生の意識を総統的に把握していくことによって、教職課程教育のより一層の充実・改善に資することを目的に行なうものであって、成績評価その他には全く関係がありません。従って思ったとおり感じたまま、ありのままに回答して下さい。

回答は特定のものを除き、回答欄に番号・記号または数字で記入し、必要な場合は空白を埋めて下さい。

ご協力ありがとうございました。
あなたの個人番号を覚えておいて下さい。

「調査」(1)で使用したあなたの個人番号→

- 【1】 何回生ですか。
 (1) 4回生 (2) 5回生以上 (3) 聴講生
¹
- 【2】 性別は。
 (1) 男 (2) 女
²
- 【3】 学部は。
 (1) 経済学部 (2) 社会学部 (3) 経営学部
³
- 【4】 あなたの実習校について
 a. 種 別 (1) 中学校 (2) 高等学校
 (3) その他 ()
⁴ 中等部
⁴ 高等部
- b. 設置者別 (1) 府県立 (2) 市町村立(組合立を含む)
 (3) 私立 (4) 国立
⁵
- c. 所 在 地 (1) 大阪府 (2) 京都府 (3) 兵庫県 (4) 滋賀県
 (5) 和歌山県 (6) 奈良県 (7) 三重県 (8) その他⁶ ()
⁵

- d. 全校生徒数 (1) ~100人 (2) 101~200人 (3) 201~300人
 (4) 301~500人 (5) 501~1000人 (6) 1001~1500人
 (7) 1501~2000人 (8) 2001人以上 (9) わからない,

e. 全教員数（非常勤講師は除く）

- (1) ~10人 (2) 11~30人 (3) 31~50人 (4) 51~70人,
 (5) 71~100人 (6) 101人以上 (7) わからない,
 f. あなたの出身校ですか
 (1) はい (2) いいえ,

【5】 実習について

a. あなたの実習期間中に、他大学生も含めて実習は何人来ていましたか

- (1) ~5人 (2) 6~10人 (3) 11~15人 (4) 16~20人
 (5) 21~30人 (6) 31~50人 (7) 51人以上 (8) わからない, 人
 b. あなたの教科の実習生総数は何人でしたか。実数を記入して下さい。 人
 (1) はい (2) いいえ,

※以下の質問には【1】で「はい」と答えた人のみ回答して下さい。
 (2) オリエンテーションの担当者は誰でしたか。該当する番号をすべて記入して下さい。

- (1) 校長 (2) 教頭 (3) 教務主任 (4) 学年主任 (5) 実習主任
 (6) 教科主任 (7) 同和主任 (8) 生活指導主任 (9), その他(
, , , , ,)

(3) オリエンテーションの内容はどのようなものでしたか。該当する番号をすべて記入して下さい。

- (1) 教育実習の目的・心構え (2) 実習校の教育目標や校区の特色
 (3) 教科指導上の注意 (4) 生活指導上の注意 (5) 学級運営上の注意
 (6) 教職論 (7) 「同和」教育 (8) 採用試験 (9) その他(
, , , ,)

- 〔4〕 オリエンテーションの総時間数はどのくらいでしたか。
 (1) やく30分 (2) やく60分 (3) やく90分 (4) やく120分
 (5) やく150分 (6) その他(やく 分),

【7】 あなたの行なった教科実習について。

(1) 担当教科目または分野は何でしたか。複数ある場合はすべて答えて下さい。

- 中学校 (1) 地理 (2) 歴史 (3) 公民 (4) その他()
 高校 (5) 日本史 (6) 世界史 (7) 現代社会 (8) 地理 (9) 健康
 (10) 政治・経済 (11) 商業 (12) その他(), 人

(2) それはあなたが希望した教科目(分野)でしたか。

- (1) はい (2) いいえ (3) 希望していない科目(分野)もある, 回

(3) 教科の担当学年は?複数ある場合は、該当学年をすべて記入して下さい。
 (4) あなたは、教科の授業を何回担当しましたか。
 (5) 授業を担当する時、指導案は何回作成しましたか。
 (6) 授業を担当する前に、指導案を見せるなどして、指導を受けましたか。もし受けた回数がわかれば、それも記入して下さい。

- (1) いつも受けた (2) だいたい受けた (3) ときどき受けた
 (4) たまに受けた (5) 受けたことがない

(7) あなたが授業する時、指導論の参観はありましたか。もし参観の回数がわかれれば、それも記入して下さい。
 (1) いつもあった (2) だいたいあった (3) ときどきあった
 (4) たまにあった (5) なかった

(8) 授業後、指導論からの指導(口頭や実習日誌への記入による)はありましたか。もしその回数がわかれば、それも記入して下さい。
 (1) いつもあった (2) だいたいあった (3) ときどきあった
 (4) たまにあった (5) なかった

【8】あなたの教科の研究授業はありましたか。

- (1)自分が担当した (2)他の学生が担当した (3) なかった ²⁴
- (10) 研究授業があった場合、終了後、批判会や反省会がありましたか。 ²⁵
- (1) あった (2)特になかった (3)個人的にあった
- 【8】(1)あなたの担当したホーム・ルームは何学年でしたか。 ²⁶ 学年

【2】ホーム・ルームの指導を行ないましたか。

- (1)ショート・ホーム・ルームのみ指導 (2)ロング・ホーム・ルームのみ
指導 (3)両方とも指導 (4)していない
- (3)ロング・ホーム・ルームを担当した人にのみ専ねます。その時のテーマは何でしたか。 ²⁷

【9】教科やホーム・ルームの指導以外に分担した仕事を以下の中からちぎり選んで下さい。

- (1)道徳教育の授業 (2)クラブ活動の指導(クラブ名)
(3)體育会への出席 (4)各種の生活指導 (5)試験の採点 (6)成績簿作成
(7)各種資料・書類の整理・作成 (8)各種金銭の収支 (9)清掃指導
(10)その他()

【10】あなたは就寝時間中、特にどういう点で困りましたか。一つを選んで下さい。
し直さなければならない場合には「 」に自由に記入して下さい。

- (1)教科の知識面 (2)教授技術面(教案づくりを含む) (3)人前でしゃべること (4)生徒指導面 (5)指導致論との関係 (6)特に困ったことはなかった ²⁸

と番号で答えて下さい。

- a. 将来、教師になった時の準備・練習
b.自分が教師に適しているかどうか確かめること
c.大学で学んだ理論面を應用したり、理論通り行かない実践の体験
d.将来の社会人・親として、教師の仕事を理解したり、学校の実態や問題点を知ること

- e.一般的社会経験として自分の視野を広くすること

- f.教授技術の習得

(2)もしょ～以外にあなた独自の成果があれば「 」に自由に記入して下さい。 ²⁹

】

【11】教育実習の期間についてどう思いましたか。

- (1)ちょうどよい (2)短かすぎる (3)長すぎると (4)わからない
【12】教育実習の期間についてどう思いましたか。できれば理由も記入して下さい。 ³⁰

- (1)あなたは出身校実習についてどう思いますか。できれば理由も記入して下さい。 ³¹

- (1)賛成である (2)反対である (3)どちらともいえない (4)わからない ³²

【13】あなたは実習に行って、教師という職業についてどう思いましたか。以下の
a～eのそれについて

- | | |
|------------|--------------|
| (1)全く同意である | (4)あまりそう思わない |
| (2)まあそう思う | (5)全く違うと思う |
| (3)何ともいえない | |

と番号で答えて下さい。

【11】(1)以下のa～fのような教育実習の目的が考えられるとして、それらはどの程度達成されたと思いますか。それそれについて

- | | |
|--------------|----------------|
| (1)充分達成できた | (4)あまり達成できなかった |
| (2)だいたい達成できた | (5)全く達成できなかった |
| (3)わからない | |

- a. 社会的に高い評価を受けている
 - b. 高給与である
 - c. 経済的に安定している
 - d. やりがい・働きがいがある
 - e. 苦労が多いわりに報われない
 - f. 楽ではあるが単調である
 - g. 軽蔑されている
 - h. 女性にとって恵まれている

上記のa～h以外に、教職というものの
[]の中に自由に記述して下さい

a. 社会的に高い評価を受けている
b. 高給与である
c. 経済的に安定している
d. やりがい・働きがいがある
e. 苦労が多いわりに報われない
f. 楽はあるが单调である
g. 軽蔑されている
h. 女性にとって恵まれている

(2) 上記の a ~ h以外に、教職というものについて特に強く思ったことがあるは
〔 〕の中に自由に記述して下さい。

(2) 上記のa～g以外に特に強く感じたことがあれば、〔 〕に自由に記述して下さい。

16] あなたは実習に行って、最近よくいわれる「教育の荒廃」の原因はどこにあると思いましたか。

(1) 以下のa～cのそれについて

(1) 全面的に原因がある (4) あまりない
(2) かなりある (5) 全くない
(3) わからない

【15】あなたは実習に行って、最近の教師についてどう思いましたか。以下のa～gのそれについて

(1) 全く同感である	(4) あまりそう思わない
(2) まあそう思う	(5) 全く違うと思う
(3) 何ともいえない	

【18】 あなたは、実習期間中、中学生や高校生に好感を持てましたか。

(1) おおいに感じる (2) 感じる (3) わからない (4) あまり感じない
 (5) 全く感じない

【19】 あなたは実習に行ってみて、性格的に教師にむいていたると思いましたか。

(1) おおいにそう思った (2) まあそう思った (3) どちらともいえない
 (4) あまり思わなかった (5) 全く思わなかった

49	<input type="checkbox"/>							
50								
51								
52								
53								
54								
55								

と番号で答えて下さい。

a. 学力不足の教師が多い
 b. 教え方の下手な教師が多い
 c. 熱心な教師が多い
 d. 信頼できる教師が多い
 e. 生徒の立場や気持ちを理解してくれる教師が多い
 f. いわゆる偏差値教育を煽(あお)る教師が多い
 g. 差別やえこひいきをする教師が多い

【20】(1) あなたは卒業後、教職につきたいという希望を持っていますか。

- (1) 国公私立を問わず、とにかく学校の教員になりたい
 (2) 特に公立学校教員になりたい、(3) 特に私立学校教員になりたい
 (4) 教職にはつきたくない

(2) (1)～(3)の番号を選んだ人は、どの程度なりたいと思っていますか。

- (1) 在業と同時に採用されれば (2) 1～2年かかるても

- (3) 教年間かかるても

(3) あなたは卒業後、もし可能ならば次のような形で教員免許を活用したいとい

う希望を持っていますか。

- a. 学校の非常勤講師 (1) はい (2) いいえ ⁶⁶
 b. 堂の教師 (1) はい (2) いいえ ⁶⁷

- c. 家庭教師 (1) はい (2) いいえ ⁶⁸

- d. 各種施設やサークルのボランティア (1) はい (2) いいえ ⁶⁹

【21】あなたは卒業後、教員免許取得のための道筋を受けるようと思っていましたか。

- (1) 小学校教員免許取得のため受けたい
 (2) 他教科()科の免許取得のため受けたい
 (3) 受けるつもりはない

【22】教育実習をぶりかえってみて、全体としてどう思いましたか。

- (1) 大変有意義であった
 (2) まあ意義があった
 (3) 何ともいえない
 (4) あまり意義がなかった
 (5) 全く無駄であった

【23】あなたは、実習終了後、教員や指導教諭に社状を書きましたか。

- (1) 書いた
 (2) これから書く
 (3) 曾くもりはない
 (4) その他()

ご協力ありがとうございました。

【24】教員養成制度、免許制度、教育実習、本学の教職課程などについて、何か意見や

希望がありましたら、自由に書いて下さい。

--	--